令和７年度

熊本大学文学部入学試験問題（後期日程）　009

小　論　文

試験時間　１２０分

（歴史学科）

注意事項

１．試験開始の合図があるまで，開いてはいけません。

２．各解答用紙に受験番号を必ず記入してください。

３．問題用紙が７枚，解答用紙が４枚，下書き用紙が４枚あります。
試験開始後，落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所などがあれば，
手を挙げて監督者に知らせてください。

４．解答は，必ず解答用紙の指定された場所に記入してください。

５．解答用紙は持ち帰ってはいけません。

６．試験終了後，問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

Aは日本史、Bは世界史についての問題です。A・Bのうち、どちらか一つを選んで解答しなさい。その際、解答用紙の指示に従って、選択した科目を○で囲みなさい。なお、問いごとに選択する科目を変えてはいけません。

A　日本史

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

内裏雛（だいりびな）の並べ方に二種類ある。男雛を向かって右に置く「京雛」と、左に置く「東京雛」である。「飛騨高山雛まつり」で市内各家に飾られている雛壇は、二種類とも見られる。「天子南面東立」という中国王朝以来の「伝統」では、「京雛」が正しい。

では、いつなぜ「東京雛」が生まれたのだろうか。これは、江戸時代社会の持っていた風習や慣習を、一九世紀半ばにヨーロッパスタイルに切り替える大きな勢いと関係がある。「欧化」を強く意識し、そこから学び取るものは、かつての先進国、中国や朝鮮よりはるかに多いという潮流は、幕末から強くなり、明治維新後は当然の国家的判断となった。天皇家は、欧米をモデルにした立憲制の下での王権保持者として再登場した時に、並び方もヨーロッパ風に変えた。戦前の各家庭の壁に掲げられた天皇・皇后の写真は左右に並べられたが、小学校儀式の際、二人の「御真影」は南面させ、向かって左に天皇像、右に皇后像を置け、という指示（一九〇一〈明治三四〉年の山梨県訓令等）が反映している。それが「東京雛」を全国化していった隠れた理由である。一九〇〇年五月一〇日、皇太子嘉仁（よしひと）親王（のちの大正天皇）と九条節子（さだこ）の成婚式が、天皇家史上最初の「神前結婚式」で行われた。近代市民の「結婚式」も、この成婚式とキリスト教会での結婚式をモデルに、日比谷大神宮が軽便な神前結婚式を造りだし、自宅での三三九度の祝言（しゅうげん）（すなわち人前結婚式）を挙げる、という「伝統」を切り崩して広がっていった。「日本」を上から下まで「欧化」という波で包んだのが、明治維新という政治的事件の文化的現れだった。「欧米」モデルをどのように学んでいたのだろうか。

一八七一（明治四）年から七三年までの岩倉遣外使節団が見てきたものについて、久米邦

武『米欧回覧実記』は雄弁である。自然から国家まで広く見てきたことは事実であるが、やはり「富国強兵」策に大きな関心が寄せられていた。同時期にフランスにいた旧幕臣、成島柳北は「劇場と美術館のパリ」を見ていたが、使節団は「要塞と工場のパリ」を見なければならなかった。彼らは、十分訓練された軍隊に驚き、英国ではアームストロング社やヴィッカース社、プロシアではクルップ社を念入りに見学している。強力な軍隊を持ち活用したために、政治や経済、社会がどのように変化したのかをたどることは、日本近代史の理解に欠かせない。①一八九四年からの一〇年間で戦争を三回経験する日本近代は、戦争という外圧と軍隊という内圧で国家と社会を変える経過を当然視するようになる。

必死で学んだ成果は、維新後二十数年間の国家財政がほぼ黒字であったところに現れている。岩倉使節団が学んできたものが生かされた、と言えよう。彼らは民権派との緊張関係をもちつつ、内政を進めねばならず、その関係は、「初期議会」期にさらに激化する。帝国議会での議論と政争こそが、「初期議会」期の健全財政をもたらしている。この時期の政争を権力闘争という狭いコップの中だけで捉えずに、近代国家のあり方をめぐる構想競争という文脈の中で捉え直したい。

②アジア各国が認めたのは、「初期議会」期の日本、つまり欧米流の近代化を進めながら、民党との議論と政争を経て、立憲制の「小さな政府」と議会を造りあげたことだった。独立した国民国家像を死にものぐるいで探りつつあった朝鮮（韓国）や、衰退するエネルギーをなんとか復活させ、王朝を延命させようとした清国などが、積極的に日本への留学生を送り出してきたのは、欧米文化を手近で学べる、便利な隣の家庭教師としてだった。清朝の有力政治家の一人張之洞は、「中〔清国〕東〔日本〕の勢力、風俗相近く、仿行〔真似〕し易し」と述べ、日本留学を勧めている（『勧学篇』）。清朝末期の日本留学生は、一九〇五、六年には八〇〇〇人を数えたという。学ぼうという意志は多くの青年を未知の小国に導いた。

多くの留学生を支える国家的制度が日本や清国にあったわけではない。欧米がアジアに経済侵出し、権益を拡大しようとして「アジアの危機」が生まれていたが、アジアの各国・地域も紡績業と在来産業を中心に国民経済の形成を進めていた。その中で、印僑（注1）や華僑などのネットワークが作られ、広がっていった。これこそ、留学生たちのもう一つの受け皿であり、それを頼りに康有為や孫文など政治亡命者が日本に入ってくる。壬午事変の失敗により金玉均ら朝鮮政府の高官も亡命してくる。インドのラス・ビハリ・ボースが亡命し、東京・中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻の厚遇を受けたこともよく知られている。彼らの亡命に、

日本政府は欧米列強や清国の圧力に対して、正面から強く対処することができず、頼りなかったが、亡命者たちはアジア間貿易で形成されたネットワークを信頼して危険を冒していた。権力者の恣意的な処断が行われやすい他のアジア地域とは異なり、罪刑法定主義が確定している近代日本、という構造がもう一つの依拠すべき条件だったのだろう。

（原田敬一『日清・日露戦争』による。原文を改めた箇所がある。）

（注1）印僑…インド人の海外居留民。

（問1）傍線部①について、ここで述べられている二回目の戦争について、三回目の戦争との関わりに留意しながら、二〇〇字以内で説明しなさい。

（問2）傍線部②の文中にある「小さな政府」とは、政府による市場への介入を可能な限り減らし、民間に経済活動を委ねることで、経済成長を促進しようとする政府のことです。「初期議会」期前後の日本が「小さな政府」だと評価できる理由を、四〇〇字以内で説明しなさい。

2 次の語句をすべて用いて、近世期の海上輸送網の発展について、六〇〇字以内で説明しなさい。

河村瑞賢　東廻り航路　西廻り航路　高田屋嘉兵衛　北前船　南海路

B　世界史

1　**次の文章㋐㋑は『岩波講座 世界歴史』第五巻の中の第一章の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。**

㋐殷周時代、中原一帯には、「邑」「国邑」と呼ばれる万単位の数の聚落が存在したとされる。国邑の規模は、大小一定しないが、一キロから四キロ四方の城壁に囲まれた都城をもち、周辺に三、四十キロ四方の耕作地、狩猟地が広がり、その土地も「邑」もしくは「国邑」の領域に含まれていたことは、近年の考古発掘などから明らかになってきた。文献史料からも『荀子』王霸に、「湯王は亳の地にあって、武王は鄗の地におり、ともに百里四方の領地であったのだが、天下は統一され、諸侯は臣下となり、足跡の及ぶ限りの所にいる輩は、すべて服従する」とみえ、百里（四〇キロ）四方が国邑の一般であったことが分かる。

殷や周の都も「大邑商」「大邑成周」などとの呼称をもっており、中原統治、四方統治の中心的存在である「国邑」として「中国」と呼ばれた。それは、西周時代の青銅器に鋳込まれた銘文の中にすでに確認される。

「中国」と方向を同じくする語としては、「中夏」「華夏」という表現がある。現存する文献史料の内、最も古いと考えられる『尚書』『詩経』の中に西周時代の言説としてそれらが引用されているが、「中国」という語がどちらかと言えば、中心的国邑といった地域的表現に傾斜するのに対して、「中夏」「華夏」は、周王朝の政治、文化の中心、もしくはその影響下にある空間といった、より観念的な意味合いを有する語と解釈される。

国邑の外には、山林、原野などが存在しているのだが、定住の如何を問わず、そこに何らかの形で居をおく集団が「夷」「狄」「蛮」などという呼称をもつ夷狄であった。『春秋左氏伝』(注1)などでは、それぞれの夷狄は、○夷（淮夷、東夷など）、○戎（犬戎、陸渾戎）、○狄（白狄、赤狄など）と個別の名称をもって記されているが、狩猟、牧畜を営む集団もあれば、半農半牧の集団も存在していた。すくなくとも彼らの居住形態は、城壁を備えてその外側に農耕地が展開するというものではなく、それゆえ、居住形態、生活習俗も国邑の構成員（国人）とは異なっていた。

ただ、ここで確認しておかねばならないことは、いうところの夷狄は、後の時代の夷狄、

つまり長城の外に存在する遊牧異民族ではなく、中原一帯において多くの国邑と隣接しあって居住していたこと、さらには、かかる夷狄は周王に「四方の積（注2）」を貢ぐことで周の統治に組み込まれていたこと、そしてそのはじめ、「中華」と「夷狄」という語は、後に優劣の評価がそこに付与される対立概念ではなかったということである。

中華（中国・諸夏）と夷狄（戎・蛮）は、はじめは単なる居住地域・存在形態の区分を示す独立した語であった。時代を経るにつれて、両者の区別が平面的な相違にとどまらず、縦系列におかれる等差、上下関係をもつ価値づけへと推移していったことは、区別が差別へと転化する普遍的現象からして、自然の成り行きであったといってよいかもしれない。さらにそれは、西周から春秋時代、戦国時代と時代の移行にともなって顕在となっていく。西周時代には、中原一帯には大小を合わせると万単位で存在していたとされる国邑が、強大な国邑、つまり有力な諸侯国が複数の国邑を傘下におき、中原における中華世界が拡大していくなかで中華に属するものとそうでないものが明確化していったのである。城壁をもつ都城と、その周辺の耕作地および牧畜地からなりたつ国邑の基本的構造は変わらなかったものの、有力諸侯国が周辺の国邑を衛星として従えるという図式を想定してもよい。

（中略）

かく、春秋の覇者、戦国の七雄国と中華衛星圏が拡大していく波間で、華北に雑居していた夷狄は、一部は中華の中に吸収されていき、一部は中華と一層鮮明に対立関係をもつようになり、また一部は、中原から離れて北に移っていったと考えられる。

華北における中華領域の拡大がもたらした夷狄の弱小化は、中華の側からすれば、自己の優位性を確立することと同時に、あるべき中華と否定すべき非中華＝夷狄を一層明確にし、華夷の実体的相違から観念的価値評価への深化を促すことになる。社会の混乱と無秩序が進行するなかで、あるべき社会、政治、そして人間としてとるべき行動への理想化が、その反対概念として夷狄を設定していったのである。

㋑内藤湖南の「新支那論」（一九二四年）に「東洋文化中心の移動」という章がある。そこでは、文化の中心が漸次移動すること、そしてもとの中心であったところが衰退していくこと、文化の発展は民族の境を越えて一つの東洋文化を形づくるということを述べている。

湖南の主張は、当時の中国と日本の国際関係、日本の役割といったある意味では政治的視座に立ったものだが、ここで私が取り挙げたいのは、民族の境を越えてそれが移動するとい

う「文化移動説」と、本章の鍵詞（キーワード）である「中華世界の重層環節（注3）」との視点の相違である。

確かに湖南が説くように、漢代までは黄河流域に文化の中心があったが、三国以後は南にそれが移動し、南宋以後、ますます文化が東南に傾いていき、外国交通が盛んになった湖南の時代は広東に中心が移りつつあった、これはそうかもしれない。しかしこの現象は、漢武帝期に完成した「中国（漢人中華帝国）」の領域のなかでの移動であり、中心が長城を越えて外に移ったとするのは、どうであろうか。なるほど、文化には国境はない。しかし政治制度、思想、つまり本章で提示した中華礼法主義（注4）という観点からすれば、長城の内側を「中国」ととらえ、その領域を中華世界とみる観念的世界は、長城の外には移動しなかったのではないか。むしろ、ことがらはその逆で、①周辺の異民族が「中国」に移り、もとから存在していた中華社会、中華国家、中華思想を継承、拡大、そして変化させた。つまり移動したのは、文化ではなく民族であり、「中国」という観念的空間を円心に、中華世界が重層環節的展開をした、そしてしつつある、私はこのように考えている。

第二点、文化の受容における純粋性、継承と受容である。具体的にいえば、儒教という思想文化、それに基づく制度、さらには礼教ということを取り挙げるなら、礼教は後漢に入って地方にも普及し、社会に浸透していった。また長城を越えて移動してきた異民族もこの礼教を学びそれを実践しようとした。その場合、文化受容の初期にあっては、受容は素朴の段階であり、素朴ゆえに礼教はそのまま実践するべきものと考え、また実践しようとした。ただ、すでに礼教が定着していた中国にあっては、分と実、理念と現実を区別することが底流にあったのだが、分実二元的受容というすぐれて中華的思考方法に関しては、その老獪（ろうかい）さを身につけていない異民族にとって理解が難しかったといってよい。

異民族の文化受容は決して二律背反を基盤とした受容ではなく、あくまで一元的であった。分と実の使い分けが定着するのは、より時間と経験を経なければならないのだ。そしてそれが定着したとき、②異民族はもはや「異民族」ではなくなっていたのである。

（冨谷至「中華世界の重層環節 その第一幕」『岩波講座 世界歴史』第五巻による。原文を改めた箇所がある。）

（注1）『春秋左氏伝』…孔子の編纂とされる『春秋』の注釈書。春秋時代の歴史書として知られる。

（注２）四方の積…地方からの貢献物

（注３）中華世界の重層環節…著者は、中華世界が異なる民族や文化をあわせ拡大・変質する歴史的展開と定義している。

（注４）中華礼法主義…著者は、礼的規範と法的規範に基づいて中華世界を治める考え方と定義している。

（問１）傍線部①に関連して、五胡十六国から南北朝時代の華北では、主に遊牧諸民族が多くの政権を建てました。特に五世紀前半以後に華北を統一した王朝の統治方法について、二〇〇字以内で説明しなさい。

（問２）傍線部②に関連して、課題文の内容を踏まえながら中華（中国）と夷狄の関係の変遷について、四〇〇字以内で説明しなさい。

2　一三・一四世紀には、様々な商人や旅行家、使節がユーラシアの東西を旅しました。このように東西交流が促進された背景やその具体的内容について、以下の語句をすべて用いて、六〇〇字以内で説明しなさい。

駅伝制（ジャムチ）　東方貿易　プラノ＝カルピニ　モンゴル帝国

ムスリム商人　『世界の記述（東方見聞録）』